

刺客と教育（模範解答）

僕の名は大五郎。父は挿一刀という政治家です。母は、僕が生まれたときの選挙戦が大変な激戦で、そのときの過労と心労が原因で死んでしまいました。父はとても嘆いて、まだ赤ん坊であった僕に向かい、自分の愛用のマイクとお母さんの形見の鞠をつきつけ、どちらを取るか迫ったそうです。

「大五郎、マイクを取ればワシと同じ冥府魔道に生きる政治家、鞠を取れば母と同じ黄泉の国に送ってやろう。さあ、選べ、選ぶんだ、大五郎！」

まだ赤ん坊であった僕はよく分からずにマイクを取り、父の後を継ぐことが決まりました。父は「亡き母の方へ行った方が、お前には幸せであろうが……不憫なやつ」と涙を浮かべたそうです。

そしてその日から、父と子の政治家修行が始まりました。

「いいか大五郎。ワシはお前に大五郎という今時めずらしい名前を付けた。いつの日かお前が立候補するとき、それだけで一万票は増えるであろう。いいか、有権者というのは、それくらい何も考えておらん。だが、ワシらは違う。必死に頭を使って、地盤と看板とカバンを守って生きていかなければ選挙には勝てぬ。そして選挙に負ければ、死んだも同然だ。このことをよく覚えておけ」

父は選挙になるといつも勝ちました。父は立会演説のときに僕を連れて行き、客寄せに使いました。僕は足が弱いことになっていて、いつも車椅子に乗っていました。主婦層はそれだけで胸がいっぱいになるようでした。

「父一人子一人の孤独な戦いです。どうかよろしくご支援ください！」

そんな父の訴えはとても効果的でした。政策の話などはしなくても、厚い同情票に守られて、父は選挙に強いという評判を得ていました。

ときには父は仕事が忙しく、何日も帰ってこないことがありました。そんなとき、僕は腹をすかせてずっと父の帰りを待っていました。そのうち、自分でインスタント食品を調理することを覚えました。あれは確か、ボンカレーという商品だったと思います。近所の人たちは、「腹が減っても、じっと我慢の子であった」と感心してくれたのを覚えています。

そんなある日、党の執行部の命令で父はお国替えを命じられました。党の決定に造反した議員を、総裁がどうしても落選させたいということで、相手候補として急きょ選挙に強い父が借り出されたのです。後援会の人たちは困りましたが、父はひとことも文句を言わずにお国替えを受諾し、僕に向かってこう言ったのです。

「地獄に行くぞ、大五郎」

苦しい選挙戦が始まりました。相手候補は新党を作って不利な戦いでしたが、こちらも見知らぬ選挙区で苦労の連続でした。それでも、車椅子を使った「父一人子一人の孤独な戦い」作戦は好評で、両者の支持率は横一線で推移しました。

いよいよ投票日を翌日に控え、立会演説会が行なわれました。相手候補のカメイ氏は、党を追い出された恨みつらみを切々と訴えました。

「いいですか、皆さん。党の公認を与えないだけならともかく、わざわざ他所の地区の挿一刀議員をですな、刺客としてこの選挙区にぶつけてきたのですよ。なんという残酷な振る舞いでありましょか」

僕は車椅子に仕掛けてあるスイッチを入れました。(実はこの車椅子は、ものすごいハイテク兵器なのです)。すると大音量で、あの歌が流れ始めたのです。

しとしとぴっちゃん しとぴっちゃん しとぴっちゃん
悲しく冷たい 雨すだれ
幼い心を 凍てつかせ
帰らぬちゃんを 待っている
ちゃんの仕事は 刺客(しかく)ぞな

涙隠して 人を斬る
帰っちゃあいいが 帰らんときゃあ
この子も雨ン中 骨になる
この子も雨ン中 骨になる

ああ 大五郎 まだ三つ

(「子連れ狼」小池一雄作詞・吉田正作曲)

聴衆はもらい泣きを始めていました。もはやカメイ候補の演説に耳を傾けるものは誰もおらず、立会演説会の流れは決定的なものになっていました。カメイ候補は叫びました。

「汚いぞ、挿一刀! こんな子供を選挙のだしに使うとは!」

そのとき、父は毅然としてこう答えたのです。

「ワシらは親子ともども冥府魔道に生きておる。普通の人間と思ってもらっては困る」

そんな父を、僕は心から誇らしいと思いました。

*この解答を送っても、国民新党の候補者公募には受からないと思いますので、念のため。それにしても、「刺客」を「しきゃく」と読む政治家やコメンテーターが多いのは残念です。皆さん、『子連れ狼』を見てなかったのかなあ?

編集者敬白